
物語の中の銀の髪

憑依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語の中の銀の髪

【Nコード】

N6778X

【作者名】

憑依

【あらすじ】

「マジック・テイル」最新ヴァーチャルリアリティのVRを使ったMMORPGである。
「マジック・テイル」をテストの頃からやりつづけている主人公が「マジック・テイル」の100年後の世界に!? 「マジック・テイル」のアバターであったレイという女性キャラクターになった男の娘の冒険の話

第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか（前書き）

これは初投稿の作品です。文字が抜けていたり、表現がおかしかったり、投稿がおそくなってしまうたりするかもしれない。それでも見ていただけたら幸いです。

第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか

ふと目を開けると光が溢れていた。

「あれ？」

ふと疑問に思った。 おかしい、俺は今日、休日だということで MORPG「マジック・テイル」をやり深夜2時頃に寝たはずだ。

この「マジック・テイル」は4年前に登場した剣と魔法のRPGである。だが米国の軍隊に使われたVRヴァーチャルリアリティというのを使いあたかも本当にゲームの中にいるような気分にするらしいその新機能を使った事により評判を呼びいまじゃ日本最大のMMORPGとなった俺は「マジック・テイル」のテストの頃からやっている。今じゃ俺は最古参といってもいい廃プレイヤーである。

とりあえず起きて現状を確認しようと起き上がった。 周りは富士の樹海・・・というよりモンソンのフィールド出てきそうな森が広がっていた。

「……なにここ？」

そう呟いたところでふとおかしい事に気がついた。 声が高い普通の俺も男の中では声が高い方だがこの声は鈴が鳴ったような声で呟いた。

よく見れば自分の服装や体もおかしい。 着ている服はそのまんなまワンピース。そして男なら普通持っていない大きな二つの膨らみが・・・

「はい!？」

胸がある!？ 顔が女らしいと言われ続けた俺が少しでも男らしくなるうと筋トレを続けていたのに筋肉の代わりに脂肪の塊に!？
これでは本当に女だと言われてしまう!

慌てて自分の胸以外の体を触りまくる。男らしいがっしりした腕が柔らかくなっている! 足も細くほっそりとして真っ白くなっている……俺の日焼けしまくりの男らしい足が……すね毛は元々なかったけど。

そして髪は腰まであり、サラサラした銀髪。

完璧に女になってしまっている。それ以外には耳がなぜか細長くなっている……ん?細長い耳、腰まで届く銀髪、そしてどちらかと言えば大きめの胸……この姿まだ顔は見えないがどこかで知っているような気がする……とりあえず男らしくなるうとしていたが何故か女になっている自分の体にテンションが下がりつつもこの樹海のような場所から出ようと思った……流石にこんなところに人はいないだろうしな。

俺の名前は、白崎^{はくせき} 陸高校^{りくこう}2年生16歳いまさら自己紹介してもやや遅い気がするがしておこう。俺は生まれつき顔が女らしかった。そのせいで男子にはからかわれ続け女子に「かわいい」なんて言われてしまうような男だ。ちなみに中学の頃の部活は家庭科調理部に入っていたおかげで男子よりも女子のほうが友達が多いという状態になっていた。なに?羨ましい?ふざけるな!修学旅行の部屋割り男子から「そういえば白崎って、男子だったな。」とか言わ

れて三日間落ち込んだ事もある俺に謝れ！

こんな嫌な記憶を俺は誰に説明してるんだ？ テンションが落ちてるせいで何かとナーバスになってるのかもしれない……

周りから黒いオーラが出てるかもしれないなーっと思いつつゆっくりと歩くと湖が見えてきた。周りには木々がないから時々人が来てるのかもしれない。

「お、ここなら。」

湖に近寄って湖面に顔を近づける。湖に映った自分の顔は感嘆と驚愕と予想していた事が当たってしまったなんかひどい顔になっていた……ここまでひどい顔は好きな女の子に告白したら「私、男の子がすきだから……あ、陸君は男の子か。」といわれたとき以来かもしれない。とりあえずため息をついた。湖に映った顔は、優しさで冷静さを併せ持った、笑顔が似合いそうな少女の顔をしていたが、目は水色に近い色をしていて、長い銀髪と普通の人間には見えない細長い耳。俺は、つい湖の中の少女の前でボソリと呟いた。

「やっぱりレイになってる。」

まあ、レイっていうのは「マジック・テイル」での俺のAvatarだ。中学二年生の時、数少ない男友達に誘われテストに行った。

正直MMORPGは初めてだったが、とことんハマった。その時に作ったAvatarがレイである姿は湖に映った自分と全く同じ姿でエルフの女性に設定した。何故女性にしたのか？……まああの頃は精神的に鬱でこんなに女らしいなら女で生まれてくれればよかったのに……とか思っていたからせめてゲームでは女でいようと思っただのだ。

「……………ネエ、ネエツテバ。」
「ん？」

湖の水を飲みつつこれからどうしようかと考えていると何か声のような者が聞こえる。 周りを見渡すが誰もいない。

「……………ナニシテルノ？……………アア、ザンネンダケドミエナイヨ？」
「……………え？ああ、精霊か。」

精霊……………まあ簡単に言うると大地のエネルギーの塊のようなものと「マジック・テイル」の公式HPには書いてあった。 エルフ系の種族専用のスキルで「対話」というのがあり、精霊の多い場所（森など）にいると精霊と会話する事によって遠くにいる魔物やプレイヤーの場所がわかるというスキルがある。 たぶん精霊が自分をエルフ系だと分かって話しているのだろう。

「何か用かしら？」

いつもの俺はこんな喋り方をしないが。 この体がレイであると分かるつついつい「マジック・テイル」の時の喋り方になってしまう。

「アナタハイセカイカラキタ？チガウ？」

「え？なんで知ってるの？」

「ダツテワタシチガヨンダカラダヨ？」

「あなた達が呼んだって……………私を？後なんでこんな姿？」

なぜレイの姿なんだろう？……………まあ実はうれしいが。

「ソレハ、コツチノカラダノハウガツクリヤスクテセツメイシヤス

イカラ。」
「説明しやすい?」

精霊の話によると、俺の元居た世界にあったMMORPG「マジック・テイル」はこっちの世界の100年前の姿、形、魔法、国、政治の状態などがそっくりだったらしい。その影響かどうかは分からないらしいが世界どうしが惹かれ合っつてぶつかる寸前にまでなっていたらしいが神様達がんばって少し遠ざけたらしい。

「もしぶつかったら?」

「フタツノセカイガブツカルト、ブンメイがマザツテタイヘンナコトニナツテタ。」

のどかな草原にいきなりビルが建ったりしていたかもしれないそうだ……

「アンシンシタノモツカノマ……コノセカイニマオウガデテクルカモシレナイノ……」

「魔王?世界征服でもしてくるの?」

「ウン……」

最近隣の大陸闇の力を使い、大陸統一をし、「魔神」と言われている人がいるらしい。そしてその「魔神」がさらなる土地を探しているらしい。まだこの大陸は見つかっていないが時間の問題らしい。闇の力は、木々を枯らせ水を黒くし、空は太陽が見えなくなる程暗雲が覆うらしい。そうなれば精霊はみんな消えてしまうらしい。だが「魔神」に対抗できる人はこの世界にはいない。

100年前にあった戦争でMMORPG「マジック・テイル」では当たり前だった魔法やスキルは今の人々は使えないらしい。そこで、精霊達は神々と交渉して遠ざけていた俺の居た世界の「マジック

ク・テイル」をしていた人達から一人選んで、こつちの世界に連れてきたという事らしい。さらに神様が「マジック・テイル」の装備、魔法、スキル、姿などはこつちで作った方が色々と楽だからという理由で魂だけを持ってきたらしい。

「何で、私が選ばれたんですか？」

「セイレイトカイワガデキルエルフデ、イチバンツヨイカラダヨ」

「……ああそういうこと。」

精霊と会話が出来るのはエルフ系の種族のみ、さらにエルフ種で一番強い俺が指名されたらしい……

「マジック・テイル」には種族と職業がある。種族というのはヒューマン、エルフ、ドワーフなど様々な種族があるが、英雄度を使うと上位種になれたりする。ちなみにギルドの依頼を解決したり、国に貢献したりすると英雄度がもらえる。たとえば、エルフの上位種にはホーリエルフ、ダークエルフ、さらにその上位種にハイエルフがある。ホーリエルフ、ダークエルフは英雄度を使うだけでなれるが、ハイエルフはエルフ系の種族がなれる上位職全てをカンストのレベル500にしなければいけないという。

職業は、剣士、魔法使い、僧侶、狩人、格闘家などがある。職業はレベル一定まで上げたり上位種でなければいけないなどの条件がある。さらに面倒くさいのがホーリエルフ、でしかなれない職業やダークエルフでしかなれない職業があつたりする。ちなみに転職は魔法使いから剣士になるということもできるがレベルは1になる。だがまた魔法使いになると魔法使いだった頃のレベルになる。つまりハイエルフになるには英雄度を使いホーリエルフになり、上位職をレベル500まで上げ、さらにダークエルフになるために英雄度を使いダークエルフでしかなれない上位職になると

いう行程が必要になる。だがこの行程が済むとエルフの最上級職のエルフマスターになれるようになる（エルフマスターになったらまたレベル1からレベル上げになるのだが……）。エルフマスターになると元々上位職で手に入れたスキルを全て使え、エルフが着れる装備全て装備できる。このエルフマスターになった（さらにエルフマスターのレベル500）のは俺だけである。ちなみにたった4年間でエルフマスターになれたのには理由があるが後々説明しようと思う。

「じゃあ、今の私はハイエルフでエルフマスターでレベル500で全ての装備を持っているってこと!？」
「ウン、ソウダヨ?カミサマがヨウイシテクレタヨ。」

俺の4年間で意外な形で有効活用されたのであった……

第1話魔法とか初実践とか少女とか

「そういえば、魔法も、使えるのよね。」

「ソリヤモチロン。アナタノイウ「レイ」トカイウヒトヲモトニシテルカラネ。ツカツテミルノ？」

「え？まあ、やりかた教えてくれる？」

「ウン！イイヨ。」

湖のすぐ側で足を伸ばして座りながら精霊と喋っている俺。傍から見ると独り言を言ってるようにみえないか心配だが魔法は打つてみたいのでそんな周囲の事は心配しない。周りに人はいないしね。

スキルには、何種類がある。火の玉で敵を攻撃したり仲間を回復したりする【魔法】。暗いダンジョンで明かりを灯したり、水の上を歩いたりする【補助】。モンスターを召喚して速く移動したり戦闘を一緒にしたりする【召喚】。武器やアイテムを作る【制作】。居合い切りなどの【魔法】と似ている【奥義】の5種類がある。精霊によると魔法は最初に魔力を集中させると魔法が発動するらしい。多分魔力とはMPの事だろう。そう思えば「マジック・テイル」の時と大して変わらない。俺は、精霊に色々助言を受けながらも魔法を発動させる。

「ハアッ！」

「ワオッ！スゴイ！」

今つかったのは【魔法 アタッカー】である。【魔法 アタッカー】とは自分のパーティメンバーの攻撃力を上げる魔法だ。ファイア等の攻撃魔法を使ってみたい気はするが、精霊が「ワタシノイバシヨヲコワサナイデ！」と言ってきたのでステータス変更の魔

法を使っていた。自分の体がほのかに暖かくなっている気がする。無事成功したようだ。

「そういえば、私の持っていた装備と違って……この聖女のワンピースだけ？」

「ウウン……タシカカミサマガ【ホジヨ】ニアイテムボックスガダセルツテイツテタツケ？」

「【ホジヨ】？……ああ【補助】ね。」

精霊がカタコトで喋っているせいでちょっとわかりづらいな……。とりあえず魔力を集中させ【補助 アイテムボックス】を念じる。目の前にいかにもRPGでありそうな宝箱が出てくる。……魔

法が便利すぎて困るな。宝箱を開けて中を見てみるが、真っ黒で底が無さそうである。どうやったら防具とかが出てくるのだろうか。

精霊に聞いても「サア？」だそうだ。それぐらい教えてくれよ神様、俺はエルフマスターになるのにどれほど装備を集めたか……

「マジック・テイル」の装備には全てランクがある。一番低いのがEランク、その次にD、C、B、Aと続き最上級にSランクがある。俺の今着ている聖女のワンピースはSランクである。防御力は他のSランク装備に比べると低めだが、装備の見た目とMP消費20%カットというスキルの便利さで主に俺が気に入っている装備である。それ以外にも俺は、破魔の弓などのSランク装備をいくつか持っていたんだが…… などと悩んでいるとアイテムボックスの中の一つのまにか金の装飾のされた弓、破魔の弓と矢筒が置いてある。破魔の弓と矢筒を出しながらしげしげと眺める。……うん本物だ。オリハルコンで作られた白と金の美しい弓。光属性付与の弓系の最強装備である。

「イキナリユミガデテキタ！」

「うん……すごいー！」

これは本当にすごい、流石魔法！ なんでもありだな！

とりあえず一通り確認出来たためそろそろ旅に出たいと精霊に伝えると丁寧近くの町を教えくれた。ちなみにアイテムボックスは消えろと念じるとスツとまるで幻のように消えてくれた。本当に便利すぎて言葉が出ない……この後、しばらく森の中をさまよいつつも外に出た。森の外は草原が広がっていた。草は自分の腰ぐらいまで伸びている。正直邪魔だと思いつつ俺は、草を払いながらすすむ。とりあえず今の心配は寝るところが見つかるかどうかだその後に「魔神」のことは考えよう。「マジック・テイル」には大陸が一つしかなかった。もしかしたら「魔神」は俺が知らない種族かもしれないし、魔法だって未知のものがあるかもしれない。正直さっぱりどうすればいいか分からない。ならせめて今の世界の事を知っておく必要があるだろう。……よくよく考えればモンスターの出てくる場所で他人から見れば弓は持っているが、ワンピース一つ、素足の少女が歩いている……うん、かなり非常識だ。「靴も履けばよかったかな？」何て呟いていると男の怒声が聞こえる。

「オラア！いつまで逃げてるんだよお！さつさと積み荷を降ろせえ！」

「もう逃げられないよう？おじさあん？諦めたらあ？」

すこし近づくと馬車に乗っている太った商人らしき人が7人のいかにも盗賊やってますって感じの人達に囲まれている。あたかも近くにいるような説明をしているが、今は大体200m位の所で眺めている。【補助 ホークアイ】という職業 狩人のスキルで見

ているこれをつかいないながら弓を使ってモンスターに気づかれる前に倒すという事もできる。……うーん、盗賊も人だし弓を向けるのは申し訳ないとは思うが、ゆっくりと腰を低くし草に隠れて進む……盗賊と商人がまだ言い合っている……意外と盗賊は良心的かもしれない。盗賊と商人との距離は大体100mぐらいにまで近づいた。ここから当たったら普通は奇跡に近い。だが俺はハイエルフでエルフマスターでレベル500の廃プレイヤーだどのぐらい遠くからモンスターに当てられるか一人でやって350mから当てたこともあるここなら十分すぎる。静かに弓を引く。狙うは一番商人の近くにいる金棒を持った無駄に筋肉ムキムキの大男。出来ればうまく脅したいので商人を殴ろうとしたところを金棒に打ちたい。え？何格好つけてんだって？いいじゃん！ちよっとロマンじやん！

「もううつぜえ！さっさとよこしやがれ！」
「う、うわあああ！」

そんな事を思っていると無駄筋さん（俺が命名）が金棒を振り上げるやっぱり見た目通りの短気な人ようだ。それでも冷静に素早く矢を放つ。矢はまるで引き寄せられるように金棒の上の方に当たる。

「うおっ！？」
「ヒイツ！」

金棒は予想通り無駄筋さんの手から吹っ飛ぶ。商人はもうびびって馬車の上で丸まっている。無駄筋さんや他の盗賊は一瞬動きが止まったが、盗賊の一人が俺の方に向けて叫んでいる。流石に遠くてよく聞こえないが多分「襲撃したのはアイツだ！」とか言っているのだらう。……おっ！3人の盗賊がこっちに走ってくる。

他の4人は馬車の周りで商人が逃げないように囲んでいる。とりあえず俺は【奥義 パラライズアロー】を打つ事にする。【奥義 パラライズアロー】はダメージが与えられない代わりに当たれば80%の確率で相手が動けなくなる麻痺を発生させる事ができる。

「ウヒイツ!？」

「アハツ!？か、体がっ!？」

「……グフツ。」

走ってきた3人の盗賊がかなり個性的に倒れる……ムサイ男が「アハツ!？」とか言うなよ……なんだよ「アハツ!？」って。3人の盗賊を踏んで行きゆつくり残りの盗賊の所に歩いて行く。残りの4人は警戒しつつも俺に話しかけてきた。

「……貴様、何者だ!」

「ガツシュ達をよくも!」

「ガツシュ達って……あつちで倒れている人達の事? とりあえずここから離れたら見逃してやらないでもないわよ?」

正直精霊と話したただけだから言葉が通じるか分からなかったが俺の喋っている言葉は通じているようで、盗賊たちがまだ若いエルフに見逃してやると言われてイラついているようだ。

「……チツ、おまえら!さっさと退散するぞ!」

残りの4人は3人の盗賊を担いで走っていく……ふう、とりあえず一人も殺さずに何とかなったな。太った商人はこっちを見ている。なんか視線がとてつもなく嫌だ。表現するなら電車の中で女子高生に痴漢をする前みたいな視線を感じる……なんで分かるんだって? 私服の時は何回か痴漢を受けたことがあるからだ……

「大丈夫ですか?」

「ああ、助かりました。盗賊に見つかってしまっし、困ったものです。で、ど、どうですか？私の所に雇われてみませんか？ええ、ええお金は後で出しますよ？せめてオルアナ王国までいいのでどうでしょう……グへへ。」

話しかけるないなや、いきなり早口でいまくる太った商人。

おそらく、護衛という仕事以外にも美少女なエルフと会話が出来れば一石二鳥的な事を考えているのだろう。はつきり言ってこんな奴なら助けなきやよかったと思いつつ、おかしいことに気がついた。

「そついえば商人さん。何でこんな人が通らない道を通ったんですか？こんな人気のないところを通っているのが盗賊に見られたらそりゃ襲われもしますよ。」

「う……そ、それはだな。この積み荷が大事なものでな、いち早くとどけなければならなかったのだよ。」

「ふーん……じゃあその大事な物をちよつと見せてください！その中身によつては雇われてあげますよ？」

「な！それはダメだ！」

「ふーん、ま、勝手に見ますけどね〜」

「ん？ハハハッ！嬢ちゃん面白いことを言うねえ。この馬車は今、最近出来た【魔法 硬化】を使って防御力が上がっているんだ！いくら嬢ちゃんの弓の腕がうまいからって壊れないさ。」

商人がニヤニヤしながら説明してくれた。【魔法 硬化】はその名の通り自分、もしくはパーティメンバーの一人の防御力を上げる魔法で、俺も持っているし、魔法使いがレベル5にもなれば覚えるような魔法だ。なんでそんな偉そうに自慢しているのだろうか。

「別に誰も壊すなんて言ってますんよ？」

「ん？じゃあどうやって見るんだい？」
「こうやって見ます【補助 サーチ】。」

【補助 サーチ】は、敵のモンスターや他人のキャラクターのレベルや装備などを見たり、フィールドに生えてる植物を探したりするのに使うスキルである。そしてこのスキルを使っているときは馬車の中のキャラクターのレベルや道具も見えたはずだ……【補助 サーチ】で見えた物は俺の想像通りの物だった。

【アリア レベル6 エルフ】

どうしてこんな人いない所を一人で渡るのが……多分人さらいのようなことをしたからではないかと俺は推測していた。もし違ったらとしてもどうせロクでもないものだったに違いない。俺は素早く馬車の後ろに走る。この馬車は外から中の物がみえないように窓一つない木の箱になっていた、唯一の扉は後ろにあるのを盗賊に近づいているときに見た。そこには南京錠で扉が開かないようにされていたが、俺は南京錠に対して魔法を発動する。

「【魔法 ウイングカッター】！」
「な……！」

商人が絶句しているのを無視して南京錠を風の刃で真つ二つにして、扉を開ける。そこには、エルフ特有の長い耳、肩につくぐらの長さの黒髪、そしてぱっちりとした青い目は目を見開いている。俺は呆然としている商人の方にゆっくりと向き、今までの人生で2番目くらいの笑顔をする。

「あなたは私に人さらいの手伝いをさせる気だったんですか？」
「うっ……ゆ、許してくれ！ こうでもしねえと女房と息子を養え

ねえんだ!」

「そんないいわけは聞きたくありません。死にたくなければ早く私の視界から去ってください。」

「ひ、ひいい!」

悲鳴を上げながら、草をかき分けていく商人。俺はそれをしばらく見ていたが、その目を馬車の中の少女に向ける。

「大丈夫?」

「あ、はい。」

「どうして連れ去られていたの?」

「え、えーとですね。私は、ハイナ教国の小さな村に住んで居たんですけど、定期的に村に商人が来るんです。私が外で遊んでいたら、馬車が一台だけだったんで不思議には思いましたけど商人だと思って近づいたらいきなり捕まえられてしまって。」

「そう、それは大変ね。」

「……そういえばですけど、ここってどこですか?」

「……それは、私も分からないの。」

「……ええー。」

黒髪の少女の呆れた声が草原にむなしく響いた。

第2話 初めての空の旅（少しだけ）（前書き）

視点変更が少しだけあります。

第2話 初めての空の旅（少しだけ）

とりあえず商人の置いていった馬車に二人で乗り、精霊の言っていた町を目指す。今は背の高い草がない、物語ではよくありそうな、なにもない草原を走っていた。アリアというエルフの少女（14歳らしい）は自己紹介して馬車に乗ってからは全く会話がなし……正直この沈黙は俺は苦手だ。しかし何か喋りたいけど、今のこの世界のこととはよく分からないため何て話しかけたらいいか分からないという状態に陥っている。

「……あの。」

「ん？何？」

「今、何処に行こうとしているのですか？」

「うーん、とりあえずこっちに行けばいいって精霊は言ってたんだけどねー。」

「何処の国の町かは聞きましたか？」

「ん？知らないって精霊は言ってたよ？」

「そ、そうですか……」

なんか、アリアは俺に不安げな目を向ける。まあ、何処に行ってるかさっぱりだから気持ちには分かるが。

しばらく移動し続けてきたが、日も沈みかけてきたので、アリアちゃんと野宿の準備をする。とは言っても、馬は周りの草を適当に食べていて、俺は【召喚 ナイトウルフ】を発動していた、ナイトウルフはレベル50くらいででてくるモンスターだが一回に五匹くらいで出てくる事が多く初心者キラーとも呼ばれたモンスターだ。俺は、ナイトウルフを5匹程召喚し、モンスターが来ないかどうか見張らせている。

「……あの、召喚どうやったんですか？」

「どうやったって……スキルを使ったただけだよ？」

「でも……召喚は三人がかりでやらないと出せないって……」

「え？そんなに必要なの？」

「えっ」

「えっ」

「……あなた何者ですか？」

「何者って言われても……言っなら森の中でずっと引き籠もり生活をしてたとか？」

「……とかって言われても……」

ひとまず世間知らずキャラで行けばなんとかなる！……きっと。

〜次の日〜

とりあえず、起きて商人の置いていった食料を適当に食べ、ナイトウルフの召喚を解除する。【召喚】で出されたモンスターや使い魔は大体12時間で自然に解除される。それ以外にもプレイヤ―が解除を命令すれば消えてくれる。「マジック・テイル」では攻撃を一緒にしてくれたり、空を飛べるモンスターなら乗って移動したり等は出来たが。こっちの世界ではもつと細かい命令を聞いてくれるようだ。

馬車にアリアと乗っていると大きな砦が見えてきた、ここが国境なのだろう……多分。

「……あの。」

「ん？何？」

「入るのには通行証とか必要じゃないんですか？」
「……あーそうだよーねーそうだろうねー。」

俺はとりあえず捨てられていた所をおじいさんに拾われ、森の中で生活していた世間知らずなエルフという風にアリアに説明したので通行証は無いと確信しているのだろう。

「とりあえず中に入ってギルドカードでも作れば国民扱いされますのでとりあえず中に入る方法を探したいんですけど。」

「……私いくつか思いついたけど……どうする？アリア？」

「中に入る方法ですか？ では言ってください。」

「……砦を破壊する。」

「……却下です。」

「な、なんでダメなの！」

「むしろ聞きますけどどうやって破壊するんですか！」

「そりゃあ、【魔法 エクスプロード】で……。」

「明らかにダメです！ 目立ちます！」

「じゃあ、あそこで見張っている騎士を皆【奥義 パラライズアロ―】で……。」

「ダメです！ とりあえず目立ってもいいから他の人達に迷惑を掛けないようにしましょう。」

「うーん、ならモンスターを召喚して……。」

「召喚して？」

「砦を跳び越えちゃおう！」

「……まあ、それでいいです。」

アリアはとても重いため息を吐いていた……流石に誘拐されて、いきなり見ず知らずの人と旅をしているのだつかれが貯まっているのだろう。俺は、とりあえずアイテムボックスを喚びだして、破魔の弓と矢筒を入れる。そしてアイテムボックスの中から純白の

杖を取り出す。この杖はシャイニングワンドというSランクの装備である。魔法攻撃力の高さと同復量の増加、光属性の魔法の威力上昇といった能力を持っている。何故破魔の弓からこっちに変わったかつて？ 破魔の弓は、矢筒も一緒に持たなければいけないから重たいという微妙な理由なので気にしない事。

「【召喚 ペガサス】」

「はい!？」

なんかアリアがとても驚いているがそれを無視して真つ白な翼の映えた白馬が現れた。おお、現実で見るとなかなか格好いい！ペガサスは一年に一週間しかおきないイベント「伝説の駿馬を探せ！」でしか出てこないボスモンスターである。HPは高いし、上級魔法をガンガン浴びせてくる、そのくせ本人はよく逃げるとめんどくさいモンスタートップ10には入るくらいのモンスターである。

「ほ、本物？私、物語でしか聞いたことが無いんですけど……」

「本物、本物。さあ！乗って乗って！」

私が素早く跨がってその後ろにゆっくりとアリアが乗る。……

ちなみに馬車は置いといて、馬車を引いていた馬は私の使い魔扱いになってましたよ、商人から盗った時に捕獲した事になったのだからうか？

「うわ！本当に空を飛んでる！」

「そうだねー。」

ペガサスで空を飛ぶと風が直に当たり中々気持ちいい。しかも俺は、飛行機にすら乗ったことがないのでとてつもなく興奮していたが、アリアはかなりおびえているようだ。

「見て見て！皆があんなに小さい！」

「ちよっ！こんなに高く飛ばないでください！皆を越えるだけなんですからもっと低く飛んでください！」

俺はもつと飛んでいたいが、アリアがあまりにもおびえて俺の体に抱きついて胸とかがくっついていてるので、皆を越えて、一気に高度を落として地面に着地する。

「空の旅楽しかったじゃん？」

「こ、こんなのだったら、本当に皆を壊した方がよかったかもしれ
ません……」

「もう、そんなにすねないで、ね？」

涙目になっているアリア……中々かわいいなあと思いつつも二人で国境沿いの町に歩いて進む。ペガサスは目立つから召喚解除した方がいいとアリアが主張するので召喚解除しておいた。

視点変更レイ レオード

「ふむ、では行ってくる。」

「了解しました団長！このルードの町は必ずやお守りいたします！
「ハハハ！その調子だ。」

私は、今オルアナ王国の国境沿いの町ルードにいる。今日、私の部隊任務は、ハイナ教国とオルアナ王国の間にあるアルネの森周辺
の調査だ。

アルネの森は、戦争の後100年間足を踏み入れた者を返さなかったという魔の森としても知られている。その理由は異常な程レ

ベルの高いモンスター達が原因である。そのせいで、今もどちらの国の領域になっていない森だ。私の部隊はその森に足を踏み入れる予定はないがアルネの森からモンスターが出ていないか周りを調査するのである。

「ルブラ隊長！あ！レオード団長も！」

「うむ、どうした！」

「砦をモンスターが飛び越えてオルアナ王国に入りました！」

「何！何故止められなかった！」

「そ、それが。そのモンスターがペガサスでして……」

「……ペガサス！？」

ペガサスは100年前の戦争の話にも出てくるモンスターである。飛びながら魔法を使い、空から雷を降らせて騎士や冒険者達を苦しめたという。そんなモンスターがオルアナ王国に入った！？

「もし、王都に入られたら！大問題になるぞ！急いで騎士を集めろ！ペガサスを探して討伐しろ！」

絶対に、王都には入らせん！

第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇（前書き）

見てくれた方、こんな文章ですがありがとうございます。

第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇

さて、俺達が街に向かって歩いているとなんかジャラジャラと装飾がしてあるいかにも騎士の偉い人だという感じの鎧を着ている人が後ろのたくさんさんの騎士を連れてこちらに向かってくる。

「何しに行くんだろうね？」

「……あの、レイさんものすごく嫌な予感がするんだけど。」

「え？何？アリア悪いことでもしたの？」

「してません！」

アリアがそんなに悪い子だったなんて……そんな事を思っていると、派手な騎士がこちらに気付き近寄ってきた……え？何？ナンパ？だったら一瞬で火の海にするよ？

「すまない、そのエルフのお嬢さん方。」

「うわ！鎧が喋った！」

「鎧なんですから中に人が居て当たり前じゃないですか。何言ってるんですか。」

うーんアリアの突っ込みは中々厳しい。派手な騎士が唐突に兜を脱ぐと俺たちに挨拶を……うわ！若！そしてイケメンな金髪のエルフであった。

「すまない、自己紹介が遅れた。私はオルアナ王国騎士団長のレオーナだ。」

「え！えーと、アリアです。」

「レイです。」

「アリアは騎士団長だと知った瞬間なにやら緊張しているようだ。とりあえず俺はこの、騎士団長を【補助 サーチ】でステータスを見る。」

【レオーナ エルフ レベル60 剣士】

騎士団長だというのにそんなにレベルが高くないんだな。もっと200位はあると思ったが。

「そんなに強くないんですね。」

「えっ？」

あ、口が滑った。

「ちょ、ちょっとレイさん！何言ってるんですか！」

「貴様！団長のレベルがいくつか知っているのか！」

騎士団長の隣にいた部下らしき人が話に入ってきた。

「うん、一応レベル60だよな？」

「レ、レイさんそんなけんか腰にならなくても。」

「ハハハ！おもしろい嬢ちゃん達だ！」

騎士団長が、豪快に笑っている。クソツイケメンめ……

「ところで、騎士の方々がこんな大所帯で何しに行くんですか。」

「ああ、そうだ。君たちに聞きたいんだがこっちでペガサスを見かけなかったか？」

「ペガサス……ですか？」

……こつちを見ないでくれアリアよ。

「ああそうだ、ついさっき騎士達にペガサスが砦を乗り越えて王国内に入ったと報告があった。君たちも何か知っているか？」

「知っているというかなんというか……その。」

「ペガサスを召喚したのは私ですけど……」

「……へ？」

騎士達が変な声を上げる。アリアは、小声で「……もうどうでもいいや。」と呟いていたのは聞かなかったことにしよう。

「やはり愉快的冗談を言うお嬢さんだ。召喚なんて君みたいな若い子二人いても出来ないよ。」

「じゃあ、見せ「すみません！ペガサスについては何も知りません！ごめんなさい！失礼します！」

アリアに声を遮られ引つ張られて猛ダッシュで騎士達から離れていくのだった。

「なんでそんなに急いでいるのよアリアは。」

「不法侵入したって事を堂々を言っているようなものですからね！」

「あ、そっかあ。」

全然気づかなかった……

しばらく二人で歩いていると、街の門が見えてきた。この街は国境側は警備が厚いが国内からはかなり簡単に入れた。

「ここからどうするんですか？ レイさん。」

「うーん、とりあえず宿屋を探しましょうか。」

「……お金は？」

「お金……」

お金は今手元にはない。とりあえず【補助 アイテムボックス】
で中にお金がないか確かめる。

「あ、あつた！」

「……なんかジャラジャラはいつてますね。」

……アイテムボックスの中に直接硬貨が山ほど入っているとどう
見ても宝箱にしか見えない。アリアがアイテムボックスの中から
一つ取り出す。

「……本物ですね。」

「アリアこれで宿屋には泊まれる？」

「こんなに金貨がたくさんあれば一生泊まれるんじゃないですか。」

「……とりあえず聞くけど、この銅貨と銀貨と金貨となんか白い硬
貨と石で出来てる硬貨は大体いくらぐらいかな？」

「うーん、石貨は1G、銅貨1枚で100G銀貨1枚で1000G、
金貨1枚で10000G。そして白い硬貨は白金貨といって10
0万Gなんですけど……国同士の貿易くらいでしか見れないような
代物ですよ。」

「マジック・テイル」ではお金は左上の方に100Gという感じ
で出ているくらいだったのでよく分からないが、神様が俺が持って
いたお金を全て金貨とかに替えたのかもしれない。

「うーんつまりいっぱいあるっていう事？」

「……すごいまとめ方ですね。」

とりあえずアイテムボックスから金貨を数枚出して商人が置いていった袋にいれる。

「一応銀貨1枚あれば家族で一ヶ月は暮らせますよ。」

「へえー。」

「ってというか門の近くでこんなにお金を見せびらかさないでください。」

「誰もいないからいいじゃない。 ささ、早く宿屋に行こう！」

……そろそろ思ったが俺は世界観以前になんか非常識になっている気がする。 浮かれすぎだろうか？

この街はレンガ造りの家が国境側の門から続く道に沿って建っている。 街の至る所では露天が開かれていてそこで、国境から出る人のための道具がたくさん売られているようだ。

俺とアリアは二人で歩きながら通行人に宿屋の場所を聞いて、向かう。

着いた宿屋の名前は「冒険の巢」。 ギルドに所属してモンスター退治などを仕事とする冒険者達が多く泊まる宿だそうだ。 宿屋に入るといかにも宿屋にいる気の強そうなヒューマンの女主人がいた。

「いらつしゃい！珍しいねえこんなか弱いエルフのお嬢さんがお二人とは。」

「すみません。 泊めてもらう事はできますか？」

「ワンルームでいいのかい？」

「はい。」

「何泊するんだい？」

「とりあえず一泊ですよ。レイさん。」

「うん、そうだよ。」

「二人で一泊……600Gになるけどいいかい？」

「はい！」

俺は袋から銅貨を6枚だし、女主人に渡そうとしたが女主人はなんか驚いた顔をしている。

「あんたらどうやってたらそんなに金貨を手に入れられるんだい？」

「どこか有名な貴族の人なのかい？」

「いいえ。ただの世間知らずです！」

「そうかいそうかい。中々おもしろいお嬢さんだね。名前は？」

「レイです。そして隣にいるのはアリアです。」

「そうかい。じゃあ部屋に案内するよ。」

女主人は機嫌良さそうに笑いながら、二階に上がり。 104と

札の付いている部屋の前まで案内し、部屋の鍵を渡す。

「ここは、荒くれ者の冒険者も多いから何かと気をつけなよ。後、

朝食は八時、昼食は十二時、夕食は二十一時って決まっているから、食べたければ下の食堂に来な！ いらなければ来なくていいから、

「はい！ありがとうございます。」

女主人が降りてから部屋に入る。中は机が一つ、椅子が一つ、

ベットが二つ、タンスが一つ、そして壁に時計が一つ掛けてあるというシンプルな部屋。俺とアリアはベットに座ったら、アリアが

話しかけてきた。

「レイさんはどうしてそんなに、すごいんですか？」

「すごいってどんな風に？」

「どんな風について……お金をいっぱい持ってて、とても強くて召喚を一人で出来る。そんな人いまじゃおとぎ話にしかないですよ。」

「ふふふ、実は1000年前から来たのだ。」

「そのほうが信憑性あります！」

「とりあえず目的はあるんだよね。」

「どんな？」

とりあえずアリアに精霊に言われた「魔神」の話伝える……まあ、異世界から来た、というのはうやむやにしたが。

「それで何がしたいんですか？」

「とりあえず国の偉い人とかに伝えられたらな」と思って。」

「多分オルアナ王国は無理ですよ？」

「えっ？」

オルアナ王国？……ああ、そういえばレオーナとか言う人がオルアナ王国所属とか言ってたっけ。

「今、オルアナ王国はヴェルズ帝国と戦争寸前なので、そんな話は聞かないと思います。」

「大陸の危機なのに？」

「そんな信憑性のない話より。目の前の問題を第一に考える筈です。」

「確かに。」

「なのでとりあえずハイナ教国に行った方がいいと思います。あそこはエルフ族がほとんどの国なので、オルアナ王国よりは話を聞

いてくれると思いますよ。」

「ふむ、なるほど。なら明日に、また砦を飛び越えなくちゃいけないかあ。」

「……まあしょうがありません。」

アリアの顔が青くなっているが、中々かわいい等と思っていると女主人がやってきた。

「ああ、そうだお嬢さん達、もうお風呂入れるから、さっさと入ってきな。旅で疲れたろう。」

……えっ？お風呂？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6778x/>

物語の中の銀の髪

2011年10月29日20時43分発行